

- (15) 鍾孝上等編者『客家的過去、現在与未来』客家的過去、現在与未来編集委员会、中華民國八〇年、六七—六八頁。
- (16) 羅香林著・有元剛訳『客家導論』上冊、吉村商会、一九七三年、一—二頁。
- (17) 陳運棟『台灣的客家人』台原出版社、一九八九年、一七五—一七六頁。
- (18) 陳運棟前掲書 九五—一六三頁。
- (19) 劉麗川「論客家民間多種信仰及其文化源頭」『客家文化』深圳大学中国文化伝播系、一九九一年、一二五—一二六頁。
- (20) 何来美等著『鄉賢談歷史』苗栗県立文化中心、一九九六年、三〇九頁。
- (21) 郭志超「閩客民間宗教差異探因」『客家研究輯刊』第十二、十三期、嘉应大学客家研究所、一九八八年、一五六頁。

南部の媽祖の多くは角宿の媽祖に由来しており、何年かごとに帰って来て香を焚き、拝謁する。角宿の媽祖の誕生日も籃筐會期である。

「台南の人々は、たくさん旗で、媽祖を出迎える」と俗にいわれている。旗は奇妙な音をたて、媽祖を出迎える時、道路ごとに人馬があふれ出て、仮装行列が行われ、奇抜さを競い合う。人々は大きく目を見開いて注目し、歓声をあげて、民間の媽祖神仰の熱狂的な様子を表している。客家人と閩南人の民間信仰には違いがあるが、こと媽祖信仰は同一である。<sup>(21)</sup>海を渡って来て開拓を始めた祖先の時代、つらいことのあった時代には、人から生まれたにもかかわらず神であり、いかなる小さなことにでも愛の庇護を与えてくれる媽祖が、何代もの間絶えることなく信仰されてきたのである。

ところで、客家古来からの一連の宗教儀式や風俗習慣はおむね「道教」の影響によるものである。そして仏教が中国に入ってから互いに混合するところがあるために、仏教と道教の識別が一般の人にわかりにくくなった。死者を供養する「公德」は道教の行事であり、読経は仏教のそれによく似ているが、リズムカルな節があつて歌のように聞こえる。そのため葬式が厳かに、しめやかに、そして優しく参列者の心を癒すのが特徴である。

キリスト教は、外来宗教であるが、太平天国を築いた客家

人、洪秀全が中国古来の伝統を加味し、かなりの信者を集めた経緯がある。

## 注

- (1) 客家研究会「客家の形成過程と産業組織」『アジア文化』第二十三号、アジア文化総会研究所、一九九八年、五〇―六九頁。
- (2) 松本一男『客家パワー 中国と東南アジアを動かす』サイマル出版会、一九九五年、七四―七五頁。
- (3) 劉錦雲『客家民俗文化』武陵出版社、一九九五年、二二頁。
- (4) Aihwa Ong, "The Gender and Labor Politics of Reproduction," *In Ann Rev. Annual Reviews Inc.*, 1991.
- (5) 劉錦雲前掲書 一一六―一一七頁。
- (6) 李泳集『性別と文化、客家婦女研究的新視野』広東人民出版社、一九九六年、二九―三二頁参照。
- (7) 同前掲注。
- (8) 劉錦雲前掲書 一二〇頁。
- (9) 同前掲注。
- (10) 黄秋芳『台湾客家生活紀事』台原出版社、一九九三年、二九―三〇頁。
- (11) 黄秋芳前掲書 三七―三九頁。
- (12) 緒方修『客家見聞録』現代書館、一九九八年、八七頁参照。
- (13) 鍾宝駒「客家民俗的別一面」『客家研究』第一集、同濟大学出版社、一九八九年、二八六―二八七頁。
- (14) 林慧懿・徐桂盛編『客家菜』飲食天地出版社、一九九六年、一五七頁。

開き、口を一文字に結び、男性の荒々しく気魄にあふれ、明るくてたくましい性質を表現している。それは媽祖の穏やかな優しさとかちょうど鮮やかな対比になっている。言い伝えでは、彼らはもとは桃花山でいつも民衆に危害を加えていた妖怪だったという。彼らは媽祖の天性の美しさを見て結婚を迫ったが、法力が及ばず失敗し、自ら願い出て媽祖を守る召使いになったそうである。

媽祖の法力は無限であるという伝説はとても多いが、その媽祖の故事の裏側にあることを見落としているように思う。それは、媽祖は民衆の苦難を自分の苦難とみなし、親身の同情を寄せてくれる、つまり人間性の一面を持っているということである。伝説によると、媽祖は林愿家の末娘であり、母親の王氏が夢の中で大士（観音）のお告げを聞き、上帝から授かった子として生まれた。生まれてから一カ月後まで声をあげて泣かなかったので、両親は彼女を「黙娘」と呼んでいた。成長した後は、上品でもの静かな女性となり、三教の書を読み尽くした。また、お経を唱え、香を焚き、仏を敬い、郷里の称賛を受けた。彼女はとても親孝行で、正義のために人を助け、仕事に励み、生涯独身だった。別の話では、黙娘は二十八歳の時の九月九日の重陽節に、海に入って人を助けようとして溺れ死んでしまい、人々は感動して、彼女を祀るために廟を建てたという。

客家人も閩南人も先祖は海を渡って台湾にやって来たが、よく一緒に媽祖の神像を携えて来た。媽祖は航海の守護神であり、沿岸部では到る所で媽祖廟を見ることができる。澎湖、鹿港の天后宮、台南の大天后宮、北港朝天宮、大甲鎮瀾宮、台北の關渡媽など皆、とても大きく、精密な彫刻がなされ、有名な媽祖廟である。台湾各地の媽祖の神像は、来源が一つではないので、顔の色が赤いものと白いものでは来源が違う。大甲の媽祖廟は鎮瀾宮とも呼ばれ、中央に媽祖が奉置され、左右に觀世音菩薩と神農が祀られている。

鳳山の媽祖廟は天后宮と呼ばれており、俗称を鳳山媽祖という。鳳山の人々は、これを最大の廟であるといい、後ろの方では別に觀世音菩薩も祀っているので、別名を雙慈亭ともいう。すべての媽祖廟が天后宮といわれているわけではなく、岡山の媽祖は做壽天宮といわれている。岡山は旧名を阿公店といい、岡山媽祖は阿公店媽ともいわれている。日本の占領時代、岡山に新しく飛行場を建設するための道路が拡張され、壽天宮は取り壊されてしまい、現在の壽天宮は後に再建されたものである。壽天宮の媽祖の誕生日は籃筐會期にあり、ほかのところとは違ったやり方で祝う。高雄県で最も古い媽祖廟は燕巢郷角宿庄の龍角寺であり、西暦一七七三年に建てられた。角宿には山中に小さな集落しかないが、龍角寺の建物は広くて立派である。角宿媽祖には盛んに香が焚かれている。

### 3、航海の守り神・媽祖について

客家人もまた福佬人と同じく「媽祖」を信仰している。

台湾は四方を海に囲まれ、沿岸の住民のほとんどが海で生計を立てているが、海はよく荒れる。そこで海には媽祖といわれる海神がいると信じられ、台湾の民間で最も一般的に祀られる神となっている。媽祖は一般的には天上聖母あるいは媽祖婆と呼ばれ、また皇帝の勅封を受けていたので、媽祖廟は天后宮ともいわれる<sup>(20)</sup>。

ほとんどの沿岸の集落には天后宮がある。高雄県の二十七の町村には三十七の媽祖を祀る廟があり、ざっと見積もって、台湾にある媽祖廟は六百以上にもなる。毎年、農曆三月の媽祖の誕生日になると、少なくとも四、五百万の信徒が、我先にと媽祖廟に香を焚き、拝みに行くので、「三月は媽祖に熱狂的である」と俗にいわれている。少年時代、大甲に住んでいた筆者もよく大甲の媽祖廟に参拝し、平安を祈願したのである。

大甲の媽祖の神輿が引き回される時には、千人もの信者が、大甲から北港まで、往復八日九夜、計三百キロを歩く。北港朝天宮では媽祖の誕生日を祝う。町の路地には誰もいなくなり、各地から善男善女が集まってくる。舞龍、舞獅、高蹺、宋江陣、南管戲、太鼓旗隊など、様々な民族芸能が催され、演じられないものはない。絶えることのない銅鑼と太鼓の音

に爆竹の音が混じり、連日それが続く。それは天地を揺るがすほどであり、爆竹は勢いよくはね、灰色の雲状に広がり、実に壯観である。

一般に言い伝えられているように、媽祖は慈悲深い神とされ、専ら危険から命を助けてくれる女神として崇められている。航海中の船では、よく逆巻く大波の中で、赤い光を見る。それによって座礁して遭難することを逃れ、危険な状態から脱出するが、漁師はこれを女神が力を出して示してくれた「媽祖火」だと信じている。突然天氣が変わって、海が荒れ、漁に出てまだ帰って来ていない家族がいると、残った家族は急いで媽祖廟へ行き、神像にすがって助けを求め、漁船が無事に帰ってくるように祈るのである。媽祖の靈驗は、多くの港町で信じられており、人々は身体の病氣や痛みのある時にも、その回復を求めて祈る。媽祖の神像は慈眉善目の表情をしており、媽祖は台湾の民間で最も親近感のある神である。一般では、媽祖のことを「姑媽」あるいは「船仔媽」と、親しみを込めて愛称で呼んでいる。

媽祖の神像の両脇には、恐ろしい顔をした、媽祖を守る男の神像がある。右の青い顔をした、手を挙げて遠くを眺めている方は、千里先まで見ることができる「千里眼」の兄で、左の赤い顔をした、手を握りしめている方は、千里先まで聴くことができる「順風耳」の弟である。彼ら兄弟は、目を見

を求めた。すると眼前にそびえていた三座山の山上に忽然と軍旗が翻ったかと思うと、兵馬の大群が出現し、河を渡って曷帝を危機から救った。彼らもまたその行き先はわからずじまいだったという。潮州の人々も皆、山の神が神将、神兵を遣わして救ってくれたのだと信じている。

多種多様な伝説が存在し、検証のしようもないが、大方は信ずるに足るものではない。それにしても、これらの故事は山の神が正義を具象化した存在を苦境から救うという点において一致している。潮州の人が建廟し、祀っている三山の神が国王と尊称されるのも、こうした理由によるものであろう。山岳信仰は古代の自然崇拜の遺風から来ており、このように客家人は郷土の守護神を敬い、山神を人格化して、大自然の崇高さに敬意を表したのである。

客家人は移民で有名な民族である。移民の歴史は苛酷なものであり、そうした辛い歴史が勤勉実直で忍耐強い性格を育んだともいえる。その生活観念は現実をより重視し、その思想は保守の二字に向かつており、豊かな想像力といったものは抑制される。そのため民間信仰も簡素で、福建の漳州や泉州の人の多神信仰とは趣を異にする。三山国王は、媽祖信仰や義民爺信仰と同じく、客家人に最もよく信奉される神である。高樹や美濃の広興など客家の村々には、それぞれに三山国王廟がある。岡山の崑山宮や阿蓮の崑崙宮で祀っている三

仙国王も三山国王のことである。

義山宮はやはり客家人移民の建廟した建物であるが、その付近にはすでに客家人の集落を見ることはできない。こうした状況は台湾各地の三山国王廟でも同様である。義山宮の付近の客家人移民は集団で屏東や高樹などの土地へ移ってしまつたといわれるが、付近の福佬居住区の住民もいつのまにか三山国王の信者となり、線香を供えて、心から守護神の庇護を求めるようになった。毎年農曆の二月二十五日は三山国王の誕生日とされ、この日は屏東などに移住している客家人が集団で帰ってきて、義山宮に香を焚き、盛大な祭典に参加するのである。

なお、客家の正月年初に「拜天公」の風習がある。夜明けとともに玄関の広間「大庁」に四角いテーブルを置き、供え物をして天の神である「天公」、つまり「玉皇上帝」を拝む。この時は爆竹を鳴らし、香を焚き、金紙を焼き、三脆九叩して恭しく神を拝し、迎年の式を行うのである。

客家の町村にある「宮廟」はまた、町村の人々の集会所であり、お祭りの場所でもある。筆者の生まれ故郷の苗栗県公館郷にある五穀宮には神農皇帝が主神として祀られているが、他に、天上聖母、三山国王、そして城隍爺も祀られている。子供の時、よく父に連れられて漢劇のお芝居を見たことがある。

という伝説の神々に対しては、彼らが台湾に移民した際、その信仰を携えてきたのは興味深いことである。以下、三山国王の由来を説明する。

橋頭農村にある九甲圍、頂塩田、下塩田の三村の村民が信奉する甲圍義山宮は、十七世紀半ば（明朝永暦年間）に建てられてから、すでに三百数十年の歴史を持つ古廟で、巾山趙王を祀る。また、新庄義山宮は明王連王を、三徳古聖廟宮は獨山喬王を祀っており、この三王をあわせて三山国王と呼ぶ。その他の地方の三山国王廟でも、三王は並べられて坐しているが、その様子は様々である。

三山国王はもともと客家人の信仰する神であった。明末遺臣鄭成功の攻台に伴い、客家人の人々が移住した際、一緒に三山国王の信仰も台湾に移ってきたのである。彼らは生活の平安はもとより、神の加護が続くこと、開墾が順調に進むことなどを願って、新しく移住し、開墾した土地に三山国王を祀って廟を建てた。また、彼らが移住の際に上陸した港にも建てた。さらに、海を渡るという冒険をして台湾に来たばかりの同郷人の心の寄り所とするために適当な土地にも建てたのである。台南立人路にある潮仙会館という唯一の潮州式建築でつくられた三山国王廟は、新築せずにそのまま潮州式建築が保存されている。客家人の移民が居を定めている村落には、ほとんどそれぞれに三山王国廟があり、いわば三山国王は客

家人の守護神である。台湾各地には推定でおよそ百三十強もの三山国王廟がある<sup>19)</sup>。

三山とは明山・巾山・獨山を指し、三山の位置は現在の広東省潮州府揭陽の阿婆墟であるという。三山国王の来歴については、諸説紛々である。一説では、唐の時代、官兵が盗賊の征伐のため潮州に赴いたが、不幸にも、賊徒に逆襲されてしまった。官兵が総崩れになり、危機一髪という時、突然、三位の騎馬配置をとった堂々たる三人の将軍が、三隊の人馬を率いて三座山からそれぞれ奔走してきて、官兵を助け、賊徒を打ち負かした。そしてその後、彼らは馬もろとも忽然と消え失せたという。のちに人を派遣して調べさせ、遍く尋ねさせたが、ついに何者かはわからなかった。そこで人々は、三座山の山の神が現れて救ってくれたに違いないと考えた。

民間にはほかにも説がある。たとえば、宋の曷帝<sup>ビシ</sup>の時代、陳有運という人物が謀反を起こした。その勢力は絶大であり、朝廷をも脅かしたため、皇帝は自ら討伐に出向くことを決めた。しかし、連戦すること九十九戦、全て敗れ、ほぼ全軍が壊滅してしまった。曷帝は後退を余儀なくされ、荒野に逃げ延びた。反乱軍はこれを追って、一路潮州に向かった。絶体絶命の時、眼前に渡ることができないほどの激流逆巻く大河が現れた。絶望の声が天に満ち、曷帝はただなすすべもなく馬から下りて河べりにひざまずき、空を仰いで神に加護

「義民亭」「義民廟」が嘉義、雲林、彰化、台中、南投等の地に建てられたのである。

ところで、新竹及び桃園地区では、毎年七月二十五日、義民爺節が盛大に催される。新竹県の横山義民廟は、伝説によると、死者を牛車に乗せて、どこに埋葬しようかと迷いながら進んで行くと、ある場所にさしかかって、牛はどうしてもそこから前へ進まなかったもので、死者の霊が指示したのだらうと、そこに墓を建てたとされている。この廟は清政府から「勅封粵東褒忠義民廟」の呼び名を賜り、廟内には清乾隆帝による「義勇」「懷忠」「褒揚」等の扁額が掲げられている。廟前の長い石段を登って行くと、朱塗りの牌坊があり、その横に大きく「褒忠亭」と書かれていた。長い年月がたつていたので、梁柱は腐り、光線も足りず、善男信女の供える線香の煙が立ち込めて、廟内はかなり狭い感じがする。

もう一つの義民廟は桃園県中壢市宋屋村にあり、もともと「褒忠亭」であったのが、清の乾隆帝の「これら忠勇の烈士を手厚く称揚すべし」という御下書により、「褒忠祠」と名を改めた。一般の信者はやはり義民廟と呼んでいる。この廟は広く、総面積が二一八坪もある。廟の前には広場があり、祭礼の日には数千の信者が野外の舞台で芝居を見ることができ。また、廟内には大殿、廻廊、新聞閲覧室、長青クラブ、花園があり、足を踏み入れた途端に厳粛な気分になり、おの

ずから崇敬の念が湧いてくる。

筆者が一九九六年二月十九日に取材に訪れた時には、祭礼の日でもないのに、線香や金銀紙を手にした大勢の信者が焼香と礼拝に忙しかった。昼間なのでフラッシュもなく、天気も小雨がちの曇りで、カメラの写真はほとんど失敗したが、外では少し撮ることができた。祭典の数日間、近年では生けにえの豚や羊の大きさを競うことのほかに、球技大会、書道コンクール、将棋、囲碁、客家山歌や創作歌謡などが同時に催され、さすがに経済発展のお蔭で村祭りも近代化されてきたのは大きな進歩であると率直に感じた。なお、昨年十月七日、新竹県長の招待で、世界客家懇親大会参加者とともに再び訪れた時は、好天に恵まれ、多くを学んだ。

## 2、客家の守り神・三山国王について

広東・福建からの移民である台湾の客家にとって、上述の義民廟崇拝のほかにも最も信奉する神は媽祖、天上聖母、神農と「三山国王」である。

毎年の農曆三月二十五日の祭日には、豚・羊・鶏等を神前に供え、野外で芝居等を演じて、盛大な祭りを催す。

客家は祖先を崇拝し、孔子、関羽、韓文公、媽祖、大道公、祖師爺などを崇拝するが、福佬人に比べると、あまり迷信や神話を作って多くの神を拝むことはしない。ただ、三山国王

福佬人より遅れてきたのが、同じ福建省の西部、永定県等五県の客家人であり、最後に続いたのが、広東省からはるる渡ってきた客家人である。いちばん遅くやってきて、人数も少ない彼らは、当然ながら団結して外敵に対抗しなければ生存できなかつた。<sup>16</sup>客家より先に移民してきた福佬人と客家人の間には、互いに風俗習慣や信仰の違い、言語の不通、政治観の不一致などから、いらぬ誤解が生じ、争いやいざこざが絶えなかつた。両者は互いに反目し合い、激しい衝突から残酷な武力闘争にまで発展することもしばしばあった。客家人は少数ながら、勇敢に戦い、毎回多くの死傷者を出した。犠牲者は一カ所に埋葬され、廟が建てられた。そして彼らを「義民爺」と尊称し、崇拜したのである。<sup>17</sup>

清朝康熙六〇年（一九七一年）の朱一貴の乱に際しては、下淡水溪地区の客家人、およそ一三の大庄（町村）と六四の小庄（小村落）の若者、計一三、〇〇〇人が、義勇軍「六推義民」を組織して、清朝の「錦の御旗」の下、政府軍と共同作戦を展開し、反乱を鎮圧したが、実はこれは大義名分で、彼らの本音は、付近の肥沃な土地をめぐる争いで日頃から感情劣悪な福佬人に対する怨みを晴らすことにあったともいわれている。<sup>18</sup>

朱一貴の乱での大功は客家の勇名を内外にとどろかせたが、この戦いで多くの若い兵士が勇敢な戦死を遂げた。屏東

県竹田郷の義塚の傍らに建つ「忠義廟」には、清朝政府から下賜された「褒忠」の扁額が現在もそのまま壁に掛けられている。その後、廟は拡充され、町村民の集会所となった。廟内にはこれら忠勇の義士の霊牌八座があるが、実際の受難者はもつと多いはずであり、これはその代表にすぎない。毎年農曆二月十日と八月十日は祭礼の日で、下淡水溪地域の客家人が大勢訪れる。この廟に避災祈願をする、と、靈驗あらたかであるとして、客家人の信仰が篤くなった。

しかし、これ以後、福佬系と客家系の同じ台湾人同士の間がみあい加深まり、ときには極めてささいなことから大規模な武力闘争にまで発展することもあった。これはまことに悲しいことである。

たとえば、一八二六年四月、たった一頭の豚が盗まれたことから、双方大乱闘を演じて、台湾中部の平原のほとんどが戦場と化し、数えきれないほどの死者を出した。事の発端は、彰化県夏林鎮大饒里の客家人、李通が福佬人と豚をめぐる争いになり、互いに放火し報復し合ったことだった。客家人は少数ながらも五ヵ月間戦い抜き、ようやく争いは鎮静化した。この戦いは北は大甲漢北の台中・南投二県に及び、南は虎尾溪南の嘉義県に及んだ。福佬人の戦死者の遺骸は各々の家族が引き取ったが、客家人は各地に散らばっていることもあり、地域毎に集められて埋葬された。こうして、



行事として受け継がれている。糍粑はもち米、ゴマ、落花生、砂糖といった比較的手に入りやすい材料だけでつくれるし、また北方で大みそかに家族そろって餃子を食べるのと同様、一家で楽しく過ごす素朴さなども、この行事が長く続いてきた理由と思われる。

モチの食べ方は、中国の他の地域でもだいたい同じであるが、餡、豆、桂花、肉など中に包むものには違いがあるようだ。日本のモチは中国のものと比べると、たいへん簡単なおもむきである。朝鮮や韓国のモチも客家の糍粑とよく似た作り方だが、細かい細工を施して見た目にも美しく、まさに美味美観といってよい。

客家人にとつての糍粑は、さまざまな思いを誘う。母の手のぬくもり、郷愁を呼ぶおふくろの味、この素朴な客家習俗は、子ども時代の思い出とともに、これからもずっと客家人の心に生きつづけるだろう。

以上は客家習俗の一端を示したものである。ただ、すでに随所でふれてきたように、中国大陆においては、改革開放の機運が客家地区にも及び、青年男女が村を出て、都市で働くようになると、生活の様式が大きく変わってきた。女性の結婚相手選びの基準も、性格、趣味、学歴等を重視するようになった。女性が意識的にも、経済的にも自立し、学校や職場で識り合った男性との恋愛など、社会の変化と時代の進歩に

よって婿選びの基準も変わる。これらは大きな前進であり、客家女性の生活も今後、時代の推移とともに、グローバルな意識が高まり、さらなる堅実な歩みを進めていくことであろう。

## 二、台湾客家人の神々の信仰

### 1、義民廟について

台湾の客家人は、「三山国王」をはじめ、「関帝」「媽祖」などを信仰しているが、最も多く崇拝されているのは、鬼神信仰の「義民爺」である。

歴史をひもとけば、台湾の客家移民の先達の血と涙で綴った奮闘の歴史、すなわち「義民」の壮絶な活躍がなかったら、客家の拓殖開墾した地域は、今日よりもっと狭かったはずである。もともと「飲水思源」(水を飲むにも井戸を掘った人のことを思う)というように、祖先の遺徳を偲び、崇拝することは、客家の宗族社会における孝の最大表現であった。それゆえ祖先崇拝と恩義に報いる孝道心が重なって、「義民爺」を篤く信仰してきた。一九九六年三月の台湾総統選挙でも、李登輝総統が「ンガイヘーハッカニン 僑係客家人」(私は客家人です)と言って勝利を祈願したほどである。<sup>(15)</sup>

ところで、移民の歴史を見ると、福建省の泉州、漳州の

二人とも顔を赤くして汗びっしょりである。

父と母の呼吸がびったりと合って、みるみるうちに、ひとかたまりのモチができあがる。母は手を打って作業終了の合図をし、それを取り出す。碓と杵についたモチの残りをていねいに少しずつ取っていた母の姿が、まぶたの奥に浮かぶ。

「さあ、つけたよ」と、母がいうと、子どもたちはワツと歓声を上げて家の中へ入り、さっそくおわんと箸を持って飯台を囲む。飯台の中央に、炒って碎いたゴマと落花生、砂糖の入ったカゴが置いてある。彼らはまるでエサを待つ小鳥のように、母の動作をじっと見守る。筆者の調査と記録はまだ続く。

母はモチを一握り取ると、玉子くらいの大きさにまるめて、ポンとカゴの中に入れる。一つ、二つ、三つ……モチがカゴの中にくらり込む。子どもたちはねらいをつけて、箸でモチをおさえ、ころがしながら、ゴマや落花生、砂糖をまぶして口に入れる。甘い香りが口いっぱいにひろがり、やわらかく粘るモチの舌ざわりも心地よく、続けざまに口に入れては飲み込むので、母はいつも「よくかんで食べないと、のどにつかえるよ」と注意する。これも家庭教育の一端である。

母はモチをまるめるのに忙しく、父もニコニコ笑って見ているので、さすがに年上の従姉は、一つずつ父と母の口に入れてあげた。父は「うまい」と口をモグモグさせ、母も「お

姉ちゃんはいらいね」といつて笑った。そして、口いっぱいはおぼつている弟に、「糍粑は消化がよくないから、食べすぎるとお腹をこわすよ、五つくらいにしておきなさい」というと、弟は「でも、まだ四個しか食べていないよ」といったので、皆、大笑いになった。家族の思いやり、きずなはこうして育つてゆくのである。

糍粑をつくるときは、どこの家でもこうしたにぎやかな幸福に包まれた。いまは農家のくらしも楽になったが、終戦に近いあのころは、食べることが子どもたちの頭のほとんどを占めていた。農家がつくった米のほとんどは政府に供出され、いつもキャベツとさつまいもばかり入ったおかゆでお腹をすかせていた時代、毎年の節句のささやかなごちそうは何よりも楽しみだった。糍粑を囲んで一家団欒のひとときは、貧しい農村の心にしみる客家「点心」の生活記事の一齣である。<sup>14)</sup>

中元節に糍粑を作る習俗は、広く客家地区に見られる。これは仏教説話に由来する。目蓮が母の病を治すために、毎年七月十五日に餓鬼に供え物をしたので、この日を鬼節とも呼ぶ。糍粑は昔の人にとってはごちそうだったので、この仏教説話と結びついて、中元節の供え物となつたらしい。その後、説話と離れて、糍粑をつくり祖先を祭る習俗だけが残った。そして、現在まで伝統習俗を守る客家農村の楽しい

加者に分けられ、各家庭で主婦たちが忙しく正月の準備をする。客家の料理にはいろいろな野菜も使うが、やはり鶏、豚、羊などの肉が主役である。各種の肉料理をつくる客家の主婦は、一家の中心的役割を演じている。

このほか、客家独自の歳時習俗には、立春や中元の行事などがある。立春はこの日から農家の一年のサイクルが始まる大切な日で、祖先の墓参りをする。そのとき鶏の血を付けた黄色の紙を墓の上に置き、まわりには十二枚の銀色の紙をめぐらす習俗が残っている。このため客家人は墓の掃除を「掛紙<sup>チ</sup>紙<sup>チ</sup>」という<sup>12)</sup>。また、七月十五日の中元は地官大帝の生まれた日とされ、大地の神に感謝する祭りを行う。一般の盂蘭盆の鬼神祭りとは少し異なるものである。

これらの年中行事は今なお農曆によって行われており、古くから農業を糧としてきた客家の農村に生きる人々の心のきず<sup>13)</sup>となっている。

#### 4、客家のモチ「糍粑<sup>チバー</sup>」

幼年時代の思い出は忘れたいものがある。たとえ七十路になっても、毎年の中元節に「糍粑」をついた子どもの頃的情景は、郷愁を伴って心によみがえる。

農曆七月十五日の中元節は道教の節日で、客家人が豊作を祝い、祖先を祭る日である。これは客家原郷の台湾苗栗地区

でも重要な節日となっている。

この日は、ほとんどの家で糍粑をつく。村にある祖先伝来の石碓を大人たちが順番に使う。子どもたちにとっては、お正月と同じようにはしゃぎ回る楽しい日であった。こうした思い出がむしろ客家人の故里を思い、国を愛する心境につながるのである。

とくに印象に残る糍粑つきの思い出から、一般的な客家農村の習俗を再現してみよう。その日、地方公務員の単身赴任から帰ってきた父と母、筆者、四歳の弟、そして筆者より五歳上の従姉も呼んで、糍粑をついた。糍粑のつくり方を筆者は今でも覚えているが、おおよそ次のとおりである。

まず石碓を洗い、蒸したもち米をセイロから石碓に移す。そして長さ一尺、重さ五キロもある大きな木製の杵を頭上まで持ち上げ、一気に打ち下ろしてつく。粵東地区の客家のモチつきは足踏み式で、五尺ほどの棒の一端に石の杵がついて、遊戯用のシーソーのように、足で踏むと杵が上がり、放すと落ちる仕掛けになっているそうだが、田舎の農村では手でつくため、かなりの重労働になる。

子どもたちにはこうしたモチつきの作業がたいへんおもしろく、皆、喜んで集まってくる。父がその重い杵を高く振り上げては、ペッタン、ペッタンと快いリズムで打ち下ろすたびに、母は碓の中のモチを掌で反す（これを「救糍」という）。

由来しており、毎年春秋の祭りには必ず祭壇に供え、儀式のあとに氏族の人々がその鶏を切り分けて、遠近の旅人にふるまったのが始まりとされている。

総じて、客家料理の特色は、日常的な材料を使用すること、素朴で郷土色にあふれていること、強烈な懐古の情が見られることなど、いずれもその苦難の歴史を映しているが、その中でひたむきに生きてきた女性たちの努力もしのばれる。これらの客家料理の逸品のどれにも、幼き頃、故郷で過ごした数々の思い出がある。そして「食」の担い手の客家女性は、また習俗の大切な守り手でもある。<sup>⑩</sup>

### 3、台湾の農村の客家習俗「殺年猪、拜天公」 サイニエンツウ バイチエングワン

台湾の客家や福佬の農村の祭りや正月には、競ってより大きい豚を神前に供えるいわゆる「天公生」の習慣がある。

年末には、心をこめて「拜天公」（天上の神々を拜む）のための豚を準備する。これを「年猪」という。一般に一、二月頃、子豚を買ってきて育てる養豚家がある。その後、毎日最も栄養のある食物を与えて飼う。

豚の子は苦心して飼育されるので、大変早く成長する。中秋節や中元節の頃、まず一、二頭が殺され、残りの何頭かは「年猪」用に残される。通常は立ち上がれないくらいまで肥えさせる。一頭の重さが五百斤（約二百五十キロ）になるも

もあるという。二、三百斤の豚はとくに大きなものとはいえないが、市場には出すことができる。

現在、台湾の農村は近代化され、豚や羊などの家畜も現代的な設備で飼育されて、各商店や市場に出されるが、筆者が子どもの頃にはまだ古い習俗が残っていた。

正月に豚を殺すことが決められている村には、いろいろな習俗がある。まず、豚を殺すとき、子どもが近づくことは許されない。また、喪にある家の人たちにもこれを見せないことが好ましいとされる。<sup>⑪</sup>

毎年、農曆（旧暦）十二月末頃になると、郷鎮（町村）で二、三回行われるこの「殺猪」の習俗で時節を感じる。毎回、早朝に豚の鳴き声があちこちから聞こえてくるので、絶えず耳をふさいでいたことを覚えている。都市に住む人家（住民）は「静かにひっそりと年を送る」ことが習慣になっているが、村の人家は依然として古い伝統・習俗で、年末のお祭り行事にぎやかに執り行う。来る年がよい年であることを願うなごんだ雰囲気郷村にただようのである。

都市に住む人家もこうした「拜天公」の習俗をなつかしみ、一塊の豚肉を買って家で拜む人も多い。農村でもその年々によつて祭りの盛大さには違いがある。また、子どもたちはよく「殺年猪」とは何かと質問して、大人を困らせる。

「年猪」を出し物にした祭りの礼拝がすむと、その肉は参

旬頃の冬至）に、神様に供える米の粉でつくったダンゴである。甘いものと干しえびや野菜の入った塩からいものがある。また、冬節は牛にもこれを食べさせる風習があり、牛生日ともいう。

・デンプン 粉板、フタバ 発板（糕）…もち米の粉をのり状にして、饅頭のようにつくった蒸しパンで、普通は碗の中に入れて蒸す。正月には欠かせないメニューである。発板は文字どおり「発」、つまりふくれるようにつくり、そのふくれる方で、その年の吉凶を占う。客家の主婦はみな上手に発板をつくって、その年の発展を祈るが、うまくふくれなければ、「不発」といって縁起が悪いこととされる。大げさにいえば女性の腕が一家の運命をも左右するのである。

・モツサイカイニョク 梅菜扣肉…皮付きの豚のバラ肉一塊を鍋でよく煮てから取り出し、黒砂糖としょうゆで着色し、油で揚げる。それを一〇〇グラムほどの長い塊に切り分けて、高菜の葉の部分に塩水につけて陰干しした「梅菜」の上に並べ、さんしょう、ういきょうの種、生しょうがなどの調味料を加えて、強火で約一時間蒸す。客家の家庭では、各種の蔬菜料理に豚の脂を多く加えて、動物性蛋白質の極端な不足を補ってきた。この料理も十分に脂がのっているが、しつこさはなく、肉がやわらかくて味にコクがあり、

香ばしくて美味である。落花生の油を使い、酒少々と氷砂糖を加えると、とりわけおいしい。これなどは純客家料理が一般の中国料理としてもなじみ深いものとなった例である。筆者が予備軍官として約二年間の軍隊生活を送ったときにも、この料理が出され、大人気だった。

・ヤムクツゲ 塩焗鶏…白斬鶏とともにやはり広く親しまれている。鶏一羽をしめてよく洗い、ういきょうの種、ねぎ、しょうが等の調味料でつくったタレを塗って紙に包んでおく。あらかじめ用意した粗塩を土鍋でいためてから、鶏を埋め、とろ火で約二、三十分間蒸す。つくり方は面倒だが、味がよく、香ばしい香りが胃袋を刺激する絶品である。名物料理として『中国菜譜』でも逸品中の逸品とたたえられている。なお、客家料理が塩をふんだんに使うのも、携帯と防腐といった保存上の理由と、濃い味つけによる節約、また熱い地方で激しい労働をする客家人の塩分補給など、かつての辛酸をなめた文化的背景によるものである。

・バツザムゲ 白斬鶏…三黄鶏（くちばし、毛、脚の黄色い鶏）をしめてよく洗い、まるごとよく煮てから、冷水につける。一羽を一〇〜二〇片の大きな塊に切り分け、しょうが、ごま油、しょうゆを合わせたタレをつけて食べる。肉はやわらかく、宴席での最高の鶏料理である。先祖の祭りに

餅、油条などをつくるかわりに、米粉を用いていろいろな食品をつくる。たとえば、米を粉にひいてつくった餃子や包子パオズのような「糰」イェ、米に水を加えてのり状にしてつくっためん類のビーフン、のり状の米に各種の材料を混ぜて蒸した「糕」ガオなど、客家の女性たちはかつての高水準の粉食技術をたくみに米食加工に応用して、今日の華南の米食文化の基礎を築いたのである。

次に客家のおふくろの味の家庭料理をいくつか紹介しよう。食文化は民族の歴史と深くかかわっている。

・釀豆腐ニョントクイフ：豆腐の中に豚肉、えび、きのこ、にらと調味料などを詰めて、弱火でコトコトと煮る。油、塩、熱の加減がコツである。客家の家で大みそかに必ずつくる風習がある。南宋末にモンゴルの襲来により南へ避難した客家が、小麦粉でつくるお正月の餃子のかわりに食べて故郷をしのんだのが起こりといわれる。

・捞飯ラオファン：大鍋に入れた米に水を足して十分に炊き上げ、ざるにすくい上げて水分をよく切り、器に盛って食べる。

広東・広西地域の客家人独特のつくり方で、炊いたご飯より水分が多いため、量が多くでき、客家女性の節約の知恵がうかがわれる。また、熱い地方での激しい労働から、水分補給の目的もあった。

・糯米飯ノミイファン：もち米をよく洗い、蒸籠に入れて蒸したデザート

トの一種である。砂糖を入れた甘いものと、豆、干しえび、いかを入れて油と塩で味つけた塩からいものがある。とても香ばしく、誰にも子どものころのなつかしいおやつである。

・菜頭板サイトウバン（羅厝板ローベツバン）：俗にいう「大根もち」で、日本の中華料理店のメニューにもある。「飲茶」ヤムチャでもよく出される一品である。

・粽ツォン（ちまき）：これも中華料理でおなじみだが、端午の節句には欠かせない思い出深い料理である。客家人だけでなく、福（鶴）佬人や、広東、湖南、江西の人々にも見られる。肉、しいたけ、いかなどの入った「塩粽」ヤムツォンと、砂糖をつけて食べる「箕粽」キフツォンがあり、もち米三、普通の米一の割合がおいしくつくるコツである。また竹の葉の包み方にもテクニクがあり、主婦たちの腕のみせどころとなっている。

・紅龜板フンクイバン：かめの型に赤く着色したモチを入れ、その中に紅豆のあんなどを入れたデザートで、お祭りによく出される。

・蘿蔔絲板ローベツスーバン：大根を糸状に切り乾燥させたものでつくったモチだが、こしやうがきいて、香ばしいデザートである。

・糰圓タウワン、糰圓シェツワン：おめでたい出来事や冬節（農曆十一月中

条件である。しかし「一九五〇年代から七〇年代、大陸ではむしろ貧農家庭で国家有用の人物が理想像であった。文革後、一九八〇年代以降になると、客家女性は山村から深圳、珠海、広州に出て働き、視野が広められると同時に、その理想も、経済的に独立して、実直で聡明、機敏で時代感覚もあり、社交性もある男性というように変化してきた。」<sup>(9)</sup>これはかつての模範労働者型からの進展である。

総じていうと、八〇年代以降、結婚に対する考え方は、それまでの経済優先で次に生殖、恋愛と続く順位から、恋愛優先、続いて生殖、経済という順位に変わった。このように客家女性の婚選びの条件も変わり、まさに社会と時代の変化に対応したものである。

この項の最後に、客家女性はふだんは人の倍も働くが、お産の時には中国のどの地域のどの民族よりも大事にされることを書き添えておく。出産した産婦に対して、客家語では「做月日」と呼んでいる。

赤ん坊が一カ月になると、若い母親はきれいな着物に着替え、一カ月も外に出ることのなかった自分の寝室から、赤ん坊を抱いて陽光の下に現れ、皆の祝福を受ける。母親はこの間、毎日最高の栄養食を摂取するため、いくぶん太りぎみで、肌が白く、つやつやしている。

客家の習慣では、お産をした若い婦人は仕事をせず、毎日

薬用風呂に入り、毎日一羽の地鶏と酒でつくった「鶏酒」<sup>ケイチウ</sup>を食べ、その他、あらゆる面でとても大事にされる。野良仕事で日焼けした客家女性も、一カ月間、太陽を浴びず、栄養たっぷりの食事をして、精神的にも家族や村人から祝福され、心のやすらぎが得られるので、そうした若く美しい主婦になりかわるのである。

## 2、食事も歳時習俗も主婦の役目

食事をつくるのは、客家の主婦の大切な仕事の一つである。どんな料理にもなつかしい母の思い出がある。とりわけ故里を遠く離れた客家の料理には、あふれるような懐古の情がある。食文化をたどれば、おのずと民族の歴史と主婦たちの知恵が浮かび上がってくる。

華北から南下した客家の先民は、米作地帯に移住したため、食生活も米が主食となった。客家の食文化は農耕社会（とくに稲作社会）を基礎としている。西普末に南遷するまで、黄河流域の中原地区に居住する客家先民は、粉食を主体としていたが、北方の麦作地帯から南方の稲作地帯に移ることにより、米食文化へと移行した。彼らは北の先進的な生産技術で、南の山間の荒地を開墾して良田となし、高温多雨に適した米を栽培したのである。

客家の主婦は、華北の人々が麦粉で饅頭<sup>マントウ</sup>、餃子、花巻、餡

彼女たちは自分で独立生計することができる。彼女たちの愛は伝統的な男に対する敬愛によるものである……」

もちろん現代の日本女性はこうではないが、温順柔和の見方にも相違がある。広東東部の男性が妻を選ぶ基準は、「第一に健康であること、第二に品格がよく賢良であること」とされている。彼らは、妻は一生生涯生活を共にする相手であり、決して花瓶を選ぶのではない、すなわち「美」は基準にならないという。客家の男性は、まさに妻を娶らば才たけて、そして体が丈夫で、仕事（労働）ができることこそ何よりなのである。

客家女性の美德は、夫への敬愛だけではない。姑に対する孝行も実によく尽くしている。彼女たちはこれを「孝敬」といい、夫の父母、祖父母に対しても、こまやかに世話をする。

たとえば、農村では栄養価の高い肉や魚をなるべく老人に食べさせる。老人を先に風呂に入れ、背中を流す。またできるだけ老人の話し相手になることなどである。<sup>(6)</sup>

総じて、客家の女性は家族の面倒をよくみて、思いやりがある。夫を理解し、寛大で忍耐強く、互いに助け合う協調性に富んでいる。貞操を守り、夫を立て、他人に嫉妬しない。儉約家ですつしみ深く、よく働く。これらはみな客家女性の賢良さの表れである。<sup>(7)</sup>

三井海上ライフデザインラボがまとめた『三十代素敵生活白書』によると、日本の三十代の主婦たちの代表的な意識は、「私が幸せなら家族も幸せ。だから私の生きたいように生きてみたい」というものである。現代の三十代主婦の最大の関心事は「自分自身」であり、経済的には「夫に依存」という「わがまま」な生き方が主流になっている。これに対して、客家の女性は経済的には自立していても、夫によく尽くす。結局は根本的な考え方の違いである。

ここで客家女性の婿選びについて、先述の劉錦雲の書から要約してみる。<sup>(8)</sup>

「一九四九年の開放前、絶対多数の女性の婚姻には自主性がなかった。父母の命による、いわゆるお見合いの極端な例を挙げよう。

女性がホールに正座し、手に一輪の生花を持ち、そっと香りをかいでいる。男性は正門の前に立ち、片足をかけて、ちよつと顔を見せるような真似をすると、それですべて終わりとなる。結婚してから、その女性の口が大きかったとか、男性がびっこだったとかわかって、もう後の祭りである。これは決して笑い話ではないのだ。」とある。

一般に、父母は自分の娘を嫁に出したら、ひたすら「安・楽」な生存条件（すなわち衣・食・住の条件がよいこと）を望んでいた。男の家の生活環境と本人の人格が婿選びの最低



等の豊かで文化的にも発達した地域に較べて、どちらかという後れている。だが、男性に対する柔順さと自立の精神を併せ持つことは、むしろ客家女性の長所とも思われる。

今日においては、男性が外地に出て事業に没頭することが以前より少なくなった。そのため客家地域の人口比率に占める男性の割合は、半世紀前に較べてずっと大きくなっている。彼らは当然、その地の農工生産活動に従事し、家事労働も分担する。しかし、なかには外に働きに出ることもなく、家事も手伝わず、ただ家の中で暇を持て余しているような悪男悪夫もたまにはいる。これはもちろん例外である。彼らにはすでに客家の精神が欠如しており、実に不甲斐ないことだ。こうした現象ゆえか、台湾でもある種の誤解が生じている。次のエピソードは筆者が実際に体験したことである。

一九六八年の夏、筆者は台湾への資料収集の旅に出て、台北から台南行きの特急列車に乗った。列車が苗栗の駅にさしかかった時、目の前に座っている二人の中年女性が、次のような会話を始めた。

「ほら、ここが例の苗栗だよ」

「ああ、住人のほとんどが客家人という県だね」

「そうそう。客家人は貧乏で、牛を飼うお金さえないので、農耕の時は女たちが牛の代わりに働くんだって」

「それじゃ、男たちはどうしているの」

「彼らは子どもをおんぶしているのさ……」

筆者はついに我慢ができなくなり、自分は六歳までこの苗栗県公館郷に住んでいたが、いくら貧しくてもそんな情けないことはない、いいかげんなことを言うな、とどなりつけたので、彼女たちは驚いて黙ってしまった。

同じ台湾人でありながら、歴史事情や生活習慣の違いから誤解が生じ、さらに言語の違いからこんなデマにまで飛躍してしまうのは、教育の問題でもあると実感する。とくに台湾同胞の族群融和の必要性を強く感じたのである。

ところで、上述のような東方の美德をそなえた客家女性が、しだいに西洋文化の洗礼を受けて変化しつつあるのは致し方のないことだ。山岳地帯での苦労話は、今となれば一種の美談ともいえない。ただ、いつの時代、どこの世界においても、また男女を問わず、柔順な人間性はせちがらい世の中を生きていく上で必要なものである。

山口縣造は『客家と中国革命』の中で、次のように評している。

「日本人女性は温順柔和で世に知られているが、客家人女性もこれに比してちっともおとることはない。しかし、日本人女性の溫柔はある点では病的である。なぜならば、彼女たちは男性に頼って生活している。男性に媚びざるを得ないからである。客家人女性の溫柔は健康態である。なぜならば、

い少ないによつて変わることがないという。

「勤儉賢淑、刻苦耐勞」の八字をもつて形容するにふさわしい農村の客家女性にみられる一種の風格は、人におのずと尊敬の念を抱かせる。客家出身の中国の大文豪、郭沫若は、一九六五年に梅県を訪れた時、客家の女性を讃えて、次の詩句を揮毫したとき。すなわち、「健婦把犁同鉄漢、山歌入夜唱豊収」（健康な婦女は犁をとつては男性と同じように働き、彼女たちの歌う山歌は夜になつても豊かな実りをたたえてひびきわたる）と。

「山歌」とは客家民謡のことである。客家の女性は山歌を歌うのがとても好きで、またとても上手である。彼女たちはつらい仕事の合間に、自らの青春を山歌にたくし、また歌で労働を励まし、まさに歌うことを健康的な楽しみとしている。

かつての封建社会における農村の客家女性は、あまり学校教育を受ける機会に恵まれなかった。封建礼教の束縛で婚姻も不自由だったが、ただ彼女たちが山歌にたくして自分の心の中なる恋の炎やほとばしる感情を訴えてきたのも、客家女性ならではのロマンではなからうか。

婚姻については、旧社会、とりわけ客家の貧困家庭の結婚習俗では、「盲婚」の風習が盛んであった。一般にこれを「童養媳」および「等郎妹」という。甚だしき場合は、「指腹

為婚」（お腹の中にいる時から婚姻が決められている）ともいわれる。かなり多くの女の赤ちゃんが、未来の夫がまだ生まれぬうちから、その家におんぶされて来る。そしてまた往々にして、彼女が成人した時に、まだ生まれないか、やつと生まれたばかりといったケースもあった。これは典型的な「請け負い婚」で、客家に限らず、一般の中国の旧式家庭や村落の習俗にもみられるものである。

筆者の伯母も「童養媳」であった。だが、彼女は小さい時から鍾家にいたので、権力もあった。筆者の母が嫁に来て、さんざんいじめられたことを父はよく口にする。ただ、一般にこれら「等郎妹」の運命は、人間社会で最も悲惨なものといつてよい。

こうした話はもちろん旧社会のことであり、現在の社会制度は当然違っている。客家の女性にとって多くの悪習は改善された。たとえばアジア人のモデル国でもある客家の国シンガポールでは、女性はすでに男性と同等に社会で働き、活躍している。ビジネスの世界では男女の差がなく、女性管理職もかなり多い。キャリアウーマンの成長ぶりは、客家の近代女性の優秀さを示すものである。

しかし、たとえ改善されたとはいえ、良きにつけ悪きにつけ、古い習俗を一気に変えるのはなかなか難しいことである。客家女性の肉体面・精神面での解放は、江蘇省、浙江省

客家の女性、歳時習俗と信仰に関する研究

表9 歴代節婦数の比較

時代	周	秦	漢	魏・晋・南北朝	隋・唐	五代	宋	元	明	清
百分比	0.02	0.003	0.06	0.08	0.09	0.006	0.41	0.96	72.9	25.47
数 字	6	1	22	29	32	2	152	359	27141	9482
目 次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

表10 歴代烈女数の比較

時代	周	秦	漢	魏・晋・南北朝	隋・唐	五代	宋	元	明	清
百分比	0.06	0.16	0.3	0.24	0.04	1	0.23	3.15	71.46	23.37
数 字	7	19	35	29	5	122	28	383	8688	2841
目 次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

表11 官方史書掲載烈女の人数

条 目	東漢	晋	隋	唐	宋	元	明
掲載された婦女人数	17	34	15	31	52	166	257
厳守貞節の婦女百分比	24 % (4)*	15 % (5)	33 % (5)	35 % (11)	62 % (32)	90 % (149)	79 % (204)
婦女貞節行為の例	0	1	0	0	10	5	32

資料：同前掲書 28 頁

訳で広く読まれていた。日本の東北の寒村を舞台にした物語だが、そこには典型的な「客家的」女性像、東洋女性の美德が思われる。それがこのドラマのアジア地域、とりわけ客家居住地域での人気の秘密といえる。

客家女性の献身的奉仕、自分の幸福を犠牲にしても夫や家族のために尽くす生き方、その「溫柔忠順」「刻苦耐劳」の精神は、たしかに彼女たちの美德である。しかしながら、現代女性にこうした美德を求めるのは困難になってきた。もとより客家女性の悲劇にはそれなりの歴史的な事情があるろうが、女性を純粹なる農工労働生産および人口生産の「道具」とみなす野蛮な觀念があるとすれば、実にゆゆしきことといわねばなるまい。

ともあれ、客家の女性は働き者である。朝早くから夜遅くまで、春は耕作、秋は収穫、夏の炎暑にも冬の寒冷にも負けず、およそ男のする仕事は何でもやつのけ、家庭内の雑事一切も常にきちんとこなす。そんな客家女性の働きぶりに対して、かつて中国で長年布教活動を行った M. Smith 牧師がその著『中国の客家』（一九〇五年）で盛んに称賛しているとおりである。また、ブリッツ文学賞のアメリカー人作家、ミチーナも『ハワイ』（一九五九年）一書で、客家の女性が多く労働者の中で際立ってコツコツとよく働く姿を描写している。その勤勉な態度は一日の工賃の多

表8 台湾竹北閩、客婦女家庭決定権

決定者	事項	家屋の建築 または立て替え	家庭での主 な物品購入	妻の外 での労働	家庭の 日常支出
	方言群別				
舅 姑	閩	12 (17.39 %)	4 (5.63 %)	6 (8.45 %)	4 (5.60 %)
	客	4 (12.90 %)	3 (9.68 %)	2 (7.69 %)	3 (9.68 %)
夫	閩	21 (30.43 %)	15 (21.13 %)	7 ( 9.86 %)	4 ( 5.63 %)
	客	14 (45.16 %)	10 (32.26 %)	5 (19.23 %)	5 (16.13 %)
妻	閩	6 (8.7 %)	10 (14.08 %)	51 (71.83 %)	50 (70.42 %)
	客	1 (3.32 %)	5 (16.13 %)	9 (34.62 %)	16 (51.61 %)
夫妻	閩	25 (36.23 %)	41 (57.75 %)	7 (9.89 %)	11 (15.49 %)
	客	11 (35.48 %)	13 (41.93 %)	10 (38.46 %)	7 (22.58 %)
舅 夫	閩	5 (7.25 %)	0	0	0
	客	1 (3.23 %)	0	0	0
その他	閩	0	1 (1.41 %)	0	2 (2.83 %)
	客	0	0	0	0
計	閩	69	71	71	71
	客	31	31	26	31

資料：同前掲書 134 頁

されている人数の比較統計では、表9、10、11に示されるように、かなり高い数値が見られる。

現代でも、世界的に著名な客家人女性には、孫文の革命を助けた汪精衛（汪兆銘）夫人の陳璧君、詩人の杜藩芳格、中国国家副主席で孫文夫人の宋慶齡、蒋介石夫人の宋美齡、フィリピン元大統領のコラソン・アキノ、ミャンマーの現政権に対抗しつづけているアウンサン・スーチー、著名作家のハン・スーイン（韓素英）、林海音、黃娟、台湾省議員の黃玉嬌、そして立法委員の葉菊蘭等が挙げられる。

これまで客家女性に封建的な「三従四徳」をかたく守り、自分の夫に対しては心から尊敬し服従してきた。昔から多くの女性たちが遠く働きに出た夫の留守を守り、つらく厳しい労働のうちに生涯を終えた。たとえ遠方の夫から何の便りもなくなり、寡婦（未亡人）同然の困難な生活を強いられても、彼女たちは不平一つもらさず、しばしばそれを「光栄」とさえしたのである。また家が火事に遭い、三度の食事にも事欠くほどの貧困にあえいでも、彼女たちは決して結婚する時に夫がくれたイヤリングを質に出すようなことはしなかった。<sup>(5)</sup>

本稿を執筆するに当たり、筆者は一九九六年の夏、フィリドワークに台湾の客家村を歩いてみた。かつて日本で高視聴率をあげた朝の連続ドラマ「おしん」が、何年か前に東南アジアで放映されたが、今度は台湾の著名な作家、鍾肇政氏の

客家の女性，歳時習俗と信仰に関する研究

表5 台湾竹北閩、客婦女纏足比較

出生年	地区 婦女数	閩南地区纏足婦女		客家地区纏足婦女	
		実数	百分比	実数	百分比
1866 以前		125	93.6	34	0.0
1866-1870		244	87.3	54	0.0
1871-1875		307	82.7	90	0.0
1876-1880		411	83.7	134	0.7
1881-1885		590	78.6	123	0.0
1886-1890		496	72.2	165	0.6
1891-1895		480	72.9	168	0.0
1896-1900		652	53.1	186	0.0
1901-1905		664	19.0	189	0.0
1906-1910		725	1.0	191	0.0
1911-1915		704	0.1	162	0.0
1916-1920		632	0.2	189	0.0
1921-1925		681	0.0	163	0.0
1925- 以後		203	0.0	38	0.0

資料：同前掲書 133 頁

表6 台湾竹北閩、客婦女の農事参与

方言群	農事参与		是		否		不適用		計	
			実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比
閩 南			47	60.26	18	23.07	13	16.67	78	100
客 家			30	71.43	5	11.90	7	16.66	42	100

資料：同前掲書 133 頁

表7 台湾竹北閩、客婦女外出工作狀況

方言群	外出工作		是		否		計	
			実数	百分比	実数	百分比	実数	百分比
閩 南			22	28.21	56	71.79	78	100
客 家			14	33.33	28	66.66	42	100

資料：同前掲書 134 頁

うした風習、意識があると推定される。

次に示した表2は、この事実を物語っている。これは中国広東省東部一帯の男女の社会分業を示したものである。

客家女性の地位と役割は、時代の変化、家族形態の変化によつて変化してきている。アメリカの人類学者M・コーエン(Myron Cohen)が台湾で行ったフィールド調査では、台湾にはまだ大家族が存在していることがわかった。<sup>(4)</sup>しかし、客家の家族形態が急速に変わりつつあることは、次の調査にも示されている。

表3、4は中国広東省の竹園村と長塘村の家族形態を示したものである。

ところで、客家の女性が、同じ台湾においても、閩南系に比してよく働くことは、中国女性の纏足の習慣の調査によつても明らかにされよう。表5はこれを示している。

また、同じく台湾の竹北地域における閩南人と客家人女性の農業への参加、および外に働きに出る状況を示したのが、次の表6、7である。

なお、同地域における閩南人と客家人女性の家庭におけるリーダーシップともいえる家庭生活の決定権については、表8の調査にも示されるように、客家女性の方が家族の長たる地位にある者に従う傾向が強く現れている。

さらに中国史上、歴代の著名な人物、また烈女として尊敬

表2 加元村の社会分業状況

性 別	労 働 分 業
男 性	田畑の耕作 (外地出張)
	竹製品の製造・販売
女 性	炊事, 食器洗い, 掃除, 水運び, 洗濯, 草刈り, 柴刈り, 野菜を植える, 衣服をつくる, 米を研ぐ, 子女の教育, 家畜の飼育

資料：同前掲書 102頁

表4 長塘村の家庭形式

家庭形式	戸数	比例
主幹家族	69	17.4 %
連合家族	42	12.4 %
核 家 族	225	65.8 %
単身家族	14	4.4 %
合 計	341	100 %

表3 竹園村の家庭形式分布

	戸数	比例	人口	比例	毎戸平均人数
核 家 族	33	41.8 %	174	37 %	5.3
主幹家族	40	50.6 %	232	50 %	5.8
連合家族	6	7.6 %	61	13 %	10
合 計	79	100 %	467	100 %	5.9

資料：同前掲書 106頁

刊行している。台湾の「客家春秋」は「客家」に雑誌名が変更され、一九九三年五月号で第三十一号を数えた。その他、東南アジア、欧米諸国における客家研究が盛んに行われている。

ところで、劉錦雲は中国大陸の「客家における婦人問題」について次のように述べている。

「旧時代、客家地区には『看家婆』と呼ばれる婚姻があった。外地に出て、戻らぬ男が多かったため、単に名義上の婚姻で寡婦となることを指す。さらに男子が戻らないため、養子を取ることも多い。三代続けて寡母、子は養子という事態も珍しくなかった。

こうした状況で、女性は再婚することもまずなかった。封建的な貞操観念の束縛が、社会的にも、女性の意識の中にも、強かったからである。

旧社会では、正しい性教育も行われず、父母の束縛が強く、男尊女卑の風潮の中で、婚姻後も女性の自由は乏しかった。特に客家の共同住宅の中では、個人の自由はなく、寡婦はそのまま一生を過ごさざるを得なかった。<sup>(3)</sup>」

中国開放後、これら旧時代の状況は大きく変化している。それは社会変動によって従来の習俗もこれに対応してきたことによるものである。とりわけ女性も外地に出て働き、新しい知識と広い視野を持ち、古い意識から脱しつつあるという

社会現象をも呈するに至った。

客家女性の地位は、社会の変動によりすでに大きく変わってきていることはいうまでもない。しかし、後述する「童養媳<sup>ヤンシ</sup>」についても、閩西（福建西部）に関していえば、ウィリアム・トーマス（William Thomas）も「不適応的少女」等で論じているが、李泳集は広東東部の七〇歳以上の女性二〇名中一〇名にその経験があると指摘し、さらに福建省客家地域の既婚女性の六〇％から七〇％が童養媳婚によると指摘する。厦門大学の鍾共生教授が一九四五年度の閩西の七郷村一四七九戸についての調査結果を表1の如く統計している。

表1 閩西童養媳人数調査表

調査地区	調査戸数	童養媳戸数	童養媳人数	童養媳戸数占調査戸数	平均毎戸童養媳人数
中山郷三民保	240	96	101	40 %	0.425
中山郷上坑保	242	66	71	27 %	0.293
茶境郷樟樹保	166	120	152	72 %	0.915
白砂郷錦華保	215	153	195	71 %	0.907
古蛟郷陳坊	156	90	94	57 %	0.602
古蛟郷丘坊	200	112	135	56 %	0.675

資料：李泳集『性別与文化：客家婦女研究の新視野』37 頁

ので、体を健康に保つことができたからであろう。こうして客家女性は屋外での耕作や薪集めから、機織り、家事全般に至るまで、その強健な肉体で、立派にこなしてきたのである。<sup>(2)</sup>客家の女性に関する研究は、当然客家学、女性学の範疇に属する。近年中国大陸の客家学の研究が、海外、国内において関心を持たれるようになってきた。その主要な成果を林嘉書は人民日報（一九九一年九月三日）の学術園地のコーナーで次の如くまとめている。

（１）ひとまとまりの研究組織の機構を設立した。上海の華東師範大学が率先して、客家学の研究室を設立した。やがて学科を中心として広がっていった。閩西（福建西部）、贛南（江西南部）、粵東（廣東東部）、深圳、広州、南昌、南京などの客家が集落を作っている中心地あるいは客家のいない地域が、互いにひきつづいて客家学の研究会を開き、大学に客家学の研究所と研究室を次々と設立した。

（２）上海人民出版社が大型の学術誌を出版した。〈客家学研究〉〈客家人〉〈寧化客家研究〉〈客家風俗〉〈北京客家〉などの地方出版物をあいっいで世に問うた。なお、同済大学ではすでに一九八九年に「客家研究」誌の第一号が刊行され、広東省嘉応大学でも「客家研究輯刊」が客家研究所（大学院）の名義で発刊さ

れている。

（３）各地の出版社はすべての客家の歴史文化著作の重版や新版を出した。京（南京）、滬（上海）、両広（広東・広西）などの出版社は、一九九〇年初につづいて著作を出版している。

（４）全国各地の幾多の学者が客家学の研究を始めている。その特色は、客家学の学者でない者や、高級職にあるといえる著名な人々、青年学者が増えたことである。

（５）研究領域が深く広くなり、明らかに進歩している。著名な史学家の呉澤教授が発表した〈建立客家学芻議〉という長論は、客家学の研究においていまだかつてなかった総括書であり、客家学の科学的な研究方法となり、また研究者の理論指導の綱要となっている。

（６）客家学の研究は中国における伝統のすぐれた精神を改めて際立たせ、中国の改革開放と祖国統一を促す大変意義のある重要なことである。これに対し、京、滬、閩、贛、粵などの地方政府も興味を持ち、支持している。近年来すでにたくさんの方の学術会議が中国各地で執り行われている。海外では、シンガポールの「客属総会訊」が一九九六年にすでに三十一号を



## 客家の女性、歳時習俗と信仰に関する研究

鍾 清 漢

キーワード 客家・女性学・序説

### 要 約

客家史は世界史であるといわれている。客家の活動が広く世界中に展開し、グローバルな近代化の内生的発展を支えてきたことは、世界の四分の一が中華民族であり、客家はその中華の精髓であるからだ。本稿は、客家の女性が客家の世界史における赫々たるすばらしい活躍を支えてきた大きな役割に着目しながら、その伝統に生きた客家の女性の生活様相・性格心情について考察し、さらに客家の歳時習俗と宗教信仰について取り上げ、客家パワーの源流を探ってみた。<sup>(1)</sup>

当然ながら、客家の男性たちが中華民族の危機存亡に際して果たしてきた数々の史実と、彼らが世界に雄飛し、羽ばたくことができたその蔭には、客家の女性たちのはかりしれぬ苦労があったのであり、それは客家研究にとって避けて通ることのできない大切な要であることはいうまでもない。

### 一、客家の女性と歳時習俗・食事

#### 1、強い女性とやさしい女性

客家人特有の社会、歴史、地理的環境、および文化伝統が、一般の中国女性とは異なる独特の客家女性をつくりあげてきた。

客家の女性たちはまず大変な労働をこなし、相当の体力を消耗する。農作業はもちろんのこと、その合間には機織りにも精を出す。客家の村では、どこの家にも紡ぎ車や機織り機がある。また彼女たちの服装は、たいてい藍、黒、白といった地味な色の上衣に長ずぼん、頭には竹笹で編んだ笠というように、あくまで機能性重視の丈夫で動きやすい労働着である。それらの休む暇もない過酷な労働に彼女たちが耐えうるのは、なんといっても中国女性の悪しき習慣である纏足<sup>てんそく</sup>をしなかつたこと、またブラジャーをつけず、胸をしめつけない